９月１７日（木）２学年医学コース　「医学セミナー」

９月 17 日（木）６時間目に、茨城県赤十字血液センター長の長谷川雄一医師をお迎えし、高校２年生医学コースの生徒を対象に講話をしていただきました。

講話では、先生が医師を目指されたきっかけや恩師との出会い、その後の人生への影響、そして臨床医としての長年の御経験についてお話しいただきました。現在では標準的な治療法の一つとなっている「骨髄移植」については、その導入当時のお話から、現在の治療薬の開発に至るまで、血液内科学が大きく進歩してきた歴史についても詳しくお話しいただきました。生徒たちは、医療技術の進歩と、それを支えてきた医師や研究者の努力に触れ、医学の発展の大きさに驚いていました。また、「医師は患者の立場になることが大切である」ということを、講話の中で強くお話しくださいました。日本の医療技術は世界的にも高い水準にありますが、一方で、医師の資質について問われたときに評価が下がることについては、私たちが考えるべき課題であるとのお話もありました。病気を治すだけでなく、患者の立場に立って考えることの大切さは、これから医学を志す生徒たちにとって、非常に重要な視点となりました。

さらに、筑波大学医学類の教育プログラムや入試についても、丁寧にお話しいただきました。特に、医学部受験において重視される面接について、実際に面接官を経験された先生ならではの視点から、大学側が受験生に何を求めているのかを具体的にお話しいただきました。大学側は、「他人に対する愛情を本音で語ってほしい」「将来、一緒に仕事をしたいと思えるような学生を求めている」といったことを重視しているそうです。また、地域医療については、その地域で活動する後継者を含め、持続可能な医療を築いていくことが大切であり、そのためにも、まずは地域の実情を知ってほしいというお話がありました。

講話の最後に、先生は高校生に向けて、「この世の問題点を解決したいという大きな望みを持ってほしい」というメッセージをくださいました。そのためにも、まずは身近なところから、小さな社会貢献を経験することが大切だというアドバイスが印象に残りました。「社会貢献」という言葉は、高校生にとっては少し重く感じられ、すぐに行動に移すことが難しいかもしれません。しかし、長谷川先生からは、「まず自分の地元を見てみる」という身近な視点を示していただきました。その一つの例として挙げられたのが「献血」です。献血は、高校生にもできる身近な社会貢献の一つであるとのお話をいただきました。講話後、生徒たちからは、「献血に行ってみようかな」「ほかにも高校生ができる小さな社会貢献はあるかな」といった声が聞かれました。

今回の講話を通して、生徒たちは医師として必要な知識や技術だけでなく、患者の立場に立って考えること、地域社会に目を向けること、そして身近なところから社会に貢献することの大切さについて考える貴重な機会となりました。